

「サマー千果」

(編集部)



地域概況

JA津軽みらい管内は、青森県の南西部に位置し、西部に岩木山、東部に八甲田連峰がそびえ、南北に平野部が広がっています。岩木川、平川と浅瀬石川が流れ、流域には肥沃な土壌が多い穀倉地帯です。また、この周辺や山間部の緩傾斜地には広大なリンゴ園が分布しています。この地域は、冬の積雪による春の雪解け水が大地を潤し、夏は八甲田連峰により偏東風(ヤマセ)の影響が少なく、温暖で日照に富み、恵まれた気象条件の中で農業生産が行われています。

JA津軽みらい、ミニトマト部会の概要

JA津軽みらいは東北地方でも有数の夏秋ミニトマトの産地です。2024年の作付けは21・6ha、ミニトマト部会の部会員は157名を数えます。部会員の多くが青森の特産品であるリンゴを作りながら、夏秋作にミニトマトの栽培を同時に行っています。

JA津軽みらい平賀グリーンセンターの成田祐介さんによると、今年の新規就農は5軒あり、部会員の高齢化が進む中でも面積がわずかながら増加している地域ということです。

「サマー千果」の栽培面積

「サマー千果」は管内全体の栽培面積の約4割で栽培されており、接ぎ木栽培で約9割の方が台木用トマト「キングバリア」を使用しています。取材し



↑左からJA津軽みらい平賀グリーンセンターで営農指導を担当されている成田祐介さんと生産者の齋藤正記さん。



↑出荷前のJA津軽みらい管内の「サマー千果」。大きめサイズでそろい色つやと食味にすぐれるとの評価。

たのは管内生産者の齋藤正記さん、平賀管内では規模が大きめの生産者です。栽培面積はハウス13棟で約800坪(約2660㎡)。JAから接ぎ木苗を購入し、4月中旬から6月下旬ごろまで段階的に定植、6月中旬から11月中旬ごろまで収穫します。品種は全体の約9割程度で「サマー千果」を栽培されています。

L、Mサイズ中心の「サマー千果」

「サマー千果」を5年以上使用されている齋藤さんに率直な評価を伺うと、L、Mサイズ中心でSサイズが少ないことが一番大きな理由とされます。取材当時、他産地の出だしが遅れている時期に当地産のミニトマトは比較的高単価で取引されており、高価格帯のMLサイズ中心に出荷できることは、収益に直結します。他品種ではどうしてもMサイズ中心のためSサイズが多くなるのに対し、「サマー千果」ではLサイズが約5割を超え、Mサイズ中心で収穫でき、Sサイズはほとんどないそうです。実際、齋藤さんがその日収



↑オガワ種苗の成田学宏営業部長(奥)と齋藤さん(手前)。

穫した「サマー千果」は、大ぶりで色つやがよく言葉どおりのサイズ感でした。齋藤さんによるとロスが少なく出荷率は9割超えとの感覚で、部会の平均反収が約7・2tに対し齋藤さんは約9tに達します。

栽培面では週単位で樹勢を見ながら液肥入りの点滴灌水を行います。「サマー千果」は節間が短いため管理がしやすい点もあるとのことでした。

収穫日を早めて

2024年問題に対応

青森という地理的理由で産地の課題となっていることが2024年物流問題。以前は収穫後1日で中央市場まで輸送できていましたが、現在は中2日に変更。そのため、2024年度にJAが主導して輸送試験も実施し、えで、収穫時期を従来より早め、品質の低下を防ぐ対策をしています。「サマー千果」は早めに収穫しても従来品種より早く糖度が上がることも確認されており、収穫後日数延長においても産地ブランド品質維持のために一役を担ってくれと信じています。



↑左が昨年の出荷基準の色回り。右が2024年物流問題に対応するため定めた新たな出荷基準。やや色が淡い段階での収穫基準に変更。